小石を集める

小川　洋子

いつ、どんな時でも、手元に本があれば、心が落ち着く。自分が愚かに思えるとき、わけもなく、一人きりだと感じてしまうとき、ただぼんやりとして心が空っぽのとき、何でもいい、本を一冊手に取ってページをめくるだけで、果てしもなく遠いところへ行ける。見ず知らずの、言葉も通じないはずの誰かの声が聞こえてくる。死者であろうと、架空の存在であろうと、その人の声はなぜか親しみ深く胸に響いてくる。

別に準備などはいらない。言葉の連なりに身を任せていれば、新たな地平に立っている自分に気づける。そこは境界線のない場所だ。善と悪、美と醜、未来と現在と過去、生と死。あらゆる区分けから解き放たれている。文学の世界だけに許される自由が、目の前に広がっている。

両手に載るほどの、小さな四角でしかない本の中に、なぜこれほどの出会いが隠れているのか、時々不思議に思う。例えば、作者もよく分からない『竹取物語』。日本最古の物語とされながら、少しも古びていない。それどころか、竹を通路として宇宙とつながる壮大な組み立てには、ＳＦ小説を読むような驚きがある。

千年以上昔の人々と自分は、同じ月を眺めている。そんな当たり前の事実に、改めて思い至る。人類の足跡がそこにあると知っている私たちでも、泣きながら月へ帰ってゆくかぐや姫の物語を、非科学的だと否定できない。時に私たちは、大事な死者や、遠くにいて会えない愛しい人の姿を、月の光の中に見いだし、悲しみを癒やそうとする。現実の境界を超えた先に、救いを求める。『竹取物語』が生まれた頃の人々と、全く同じように。

あるいは『今昔物語集』を出典として芥川龍之介が描いた『羅生門』。平安時代と大正と現代が、一つの物語によって結ばれている。その結び目は滑らかで、時代の隔たりなどみじんもない。目まぐるしく変化する登場人物たちの心理を追いかけるうち、自然と羅生門の楼の風景が浮かび上がってくる。死体の髪の感触がてのひらに伝わってくる。いつしか、自分の中に潜む、ごまかしきれない悪の気配に気づいて立ちすくむ。

ただし読者は、『羅生門』に描かれる人々を裁く役目は負っていない。非難したり、正そうとしたりする必要もない。文学の世界にいる限り、私たちは善悪という社会的な基準よりももっと自在な、懐の深い視野を持つことができる。羅生門の楼にいる下人を鏡とし、そこに写る自分を見つめ、自身でも意識していなかった心の奥底に、光を当てる。心を豊かに掘り起こしてくれる鏡が、文学の中にはいくつもある。

読書は無言の対話だ。声なき声だからこそ、遠くまで届く。日常生活の言葉が、家族や友人や社会など、他者へ向かって発せられるのに比べ、文学の言葉は読み手の内面へ、どこまでも深く届いてゆく。一見、地味な行為だと誤解されるが、一人の読み手の中では、劇的な変化が起こっている。もしかするとそれは、ほかの人と共有するのは難しい種類の変化かもしれない。逆に言えば、文学に感動するのは、誰にも奪えない自分だけの宝石を手にしているのと同じなのだ。

しかし、宝石は最初から磨き上げられた完成品として、光を放っているわけではない。一度読んで、単なる小石の感触しか残らず、そのまま忘れ去ってしまう場合も多い。それなのに、どれほど長い年月が過ぎようと、本のほうは読み手を覚えている。その人にとって大切な本とは、再び巡り合えるよう、文学の偶然が取り計らっている。

再会したとき、本が見せる新たな光に驚かされる経験は、神秘に満ちている。味気ない小石が、いつの間にか輝く宝石に変わっている。一冊の本が、自分だけのために辛抱強く待ち続けてくれていたのだ、という格別な喜びに浸ることができる。

若いうちにどんどん小石を集めておけばいい。目先のもろもろは脇に置いて、ゆったり文学と付き合えばいい。小石たちは時空を超えた永遠の流れの中に、自分の居場所を作るための星座となる。いつか宝石のように光を放ち、心の内を照らしてくれる。